
『dejavu』

阿傘 唯

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『dejavu』

【Nコード】

N4881BA

【作者名】

阿傘 唯

【あらすじ】

小説『case』4部作の続編です。

高校を卒業し、大学生になった『唯』と『七海』の身に起こる『デジャビュ』とは…？

『ギャグ』と『ファンタジー』を無理やり融合させた、無計画小説『dejavu』をよろしくお願い致しますぞよ。

d e j a v u 1 (前書き)

小説『c a s e』4部作の続編ですが、この作品から読んでも大丈夫にして行くつもりです。

dejavu 1

ある晴れた日、僕は2年前の事を思い出していた。

僕がまだ、高校生だったあの頃に『あんな事』が起きてから早2年が経つ。当時はテレビや新聞などで、世間を賑わしていたが、2年と言わず、1ヶ月もすれば、人々からあの事件は忘れ去られていた。

「記憶…、ね…。」

僕は一人言を言いながら、大学へと向かっていた。

僕が通う大学、『新東京文芸技術大学』（通称東芸大）は、まだ出来たばかりの大学で、僕らが第一期生である。つまり、全員が新入生であり、先輩も後輩もない。

「あ、唯！遅いわよ！待ちくたびれちゃった！」

校舎の入り口で、ひと際大きな声で呼んでくる女の子。

「ごめん、七海。美樹が忘れ物しちゃったみたいで、ついでに届けていたんだ。」

僕は、目の前の女の子に謝る。

「もう、美樹ちゃんのせいにして。どうせまた、ボケっとして電車に乗り遅れでもしたんでしょ？」

女の子は僕を詰る。

「ま、いいわ。行きましょ？」

女の子はくるっと踵を返し、僕の前を歩く。

彼女の名前は『阿傘 七海』（あがさなつみ）。高校生の時に知り合ってから、今までずっとこんな調子だ。

いや…、普段はこんなもんじゃないか…。

僕は、今まで七海にされてきた仕打ちを思い出し、少し頭痛がしてきた…。

「どうしたの、唯。志茂田景樹が豆鉄砲食らったような顔をして。」
「どんな顔だ! 『鳩が豆鉄砲』 だろ! しかも使い方間違ってるし! 謝れ! 景樹さんに謝れ!」

「『景樹さん、過激な事を言ってスイマセン。』」
「ウマくない!? 全然ウマくない! しかも棒読み!? 心こもって無い!」

「景樹さん、心を込めて、過激さん。」

「なぜ五七五につ!? しかも意味全く不明っ!?」

「何よ。あなたが『謝れ』って言ったから、謝ったんでしょ? その: 『ハデス』さんに。」

「『景樹』さんて今自分でも言えたでしょうが! たしかに『ハデス』さんぽいけど、て僕の馬鹿!」

はあ…。やっぱり、七海は今日も絶対調だ…。僕もだけど…。

そんな馬鹿なやり取りをしながら、僕らは、まだ新品の教室に入る。

「やっぱり、綺麗よね、この大学。」

七海は嬉しそうに言う。

「さすがは『新設大学』だけあるわね。偏差値高かったから、絶対に受からないと思ってたけど。」

僕もそうだ。ホント、よく受かったよな…。しかも、二人して…。

「一緒に勉強頑張ったもんね? 試験近くななんか、ほぼ毎日徹夜で。」
七海は笑顔で続ける。僕は、七海のこの顔が一番好きだ。

「美樹ちゃんや、真夜ちゃんまで一緒になって頑張ってたもんね?」
美樹と真夜、というのは二人とも僕の妹だ。血は繋がっていないけど…。

「二人とも、無事私達がいた高校に合格したし、全員まとめてハッピーよね?」

七海ははしゃいでいる。

そう言えば、あれ以来、七海はこういう笑顔をよくするようになった。

やっぱり、ずっと重荷を一人で背負っていたんだな…。

「唯？聞ってる？」

「え？…ああ。ちゃんと、聞ってるよ。」

また僕は、昔の事を思い出していたようだ…。
最近特に多いな…。

「そういえば、七海。今日のレポート持って来たぞ。お前、自分の分忘れてっただろ。」

僕はカバンからレポートを取り出す。

「あ！そうだ、もう一度確認しようと思って、テーブルに置いたままだった！サンキュ、助かる！」

意外にこういう所は、抜けてんだよな…。

僕は七海にレポートを渡し、後ろの方の席に座る。

この『東芸大』は文学部のみの大学で、授業は全て選択制。必須授業というものは無い。

自分の履修したい科目の単位を取り、4年生になったら、目的の研究室に所属し、卒業研究のテーマを決め、最後に研究発表に合格すれば、晴れて卒業、といった具合である。

「なあ、この学校って僕らが第一期生だろ？」

僕は、七海に聞いてみた。

「じゃあ、4年生で卒業研究するって言っても、先輩もいないのに、何を研究すればいいんだろうな？」

普通の大学では、先輩の研究を引き継ぎ、それを研究発表し、また後輩に引き継ぐ…とかなんとか言ってたのを、僕は思い出していた。

「そうねえ…。」

七海は考え込む。

「自分達で、自由に決めていいんだってさ、唯君。」

「え？」

ふいに後ろから声を掛けられ、ビックリする。

「おはよう。今日は遅い登校だね。阿傘さんも、おかんむりだったんじゃない？」

少し髪色が茶色がかった、中性的な顔立ちの生徒が声を掛けてきた。
「なんだ、レイじゃん。珍しいな、お前が午前中から学校にいるなんて。」

こいつの名前は『九真桐 零』（くまぎりれい）。女みtainな顔をしているが、れっきとした男だ。

「あら、クマくん。おはよう。」

『クマくん』とは七海がレイに付けたあだ名だ。僕と同じ呼び方をしない所が、七海らしいが…。

「ふふ。お邪魔だったかな？」

レイは含んだような言い方でそう言ったが、根は良い奴っぽい事を僕は知っている。

「そんな事ないさ。今日は、お前も授業に出るんだろ？」

「ああ。たまには出とかなないと、一年生で留年になっちゃうしね。」

レイは笑いながら言った。いや、笑いごとではないと思うのだが…。
僕らは、三人で長椅子に座り、午前の授業を受ける事にした…。



「ふう。久しぶりに授業に出ると、肩が凝るもんだね。」

レイは片手で肩を揉みながら言った。

「普段からちゃんと出席していないからだぞ？ レポートだって、急いで僕のをまる写ししてたし…。」

僕は、ぶすつとした表情で言った。

「あはっ。そんな顔も可愛いね？ 唯君。」

「お前まで、そんな事を言うのか…。」

僕は、いつも七海に似たような事を言われているから、慣れている

が…。

「クマくん？唯は渡さないわよ？」

「おっと、怖い。気を付けないと。」

そんなレイと七海の会話を聞き流しながら、僕らはお昼を食べるため、学食へと向かう。

「この学食って、どうしてこんなに安く出せるのかしらね？」

七海が聞いてきた。

僕は、基本的には『お弁当派』なので、高校の時と同様、大学にもお弁当を持参（もちろん七海の分も僕が作る）しようと思ったのだが、あまりにも学食が安く、しかも、僕のこの舌を唸らせるほどのおいしさとのコンボを食らってしまい、お弁当持参は1週間でやめる事にした。

今は、美樹と真夜の分のお弁当しか作っていない。

「新設の学校だから、特別に学校側で費用の大部分を負担しているんだってさ。」

僕の代わりにレイが答えた。

「へえ、ずいぶん気前が良いんだな。」

僕は関心した。

しかも、あの味を出せる料理人まで雇っているなんて…。

「まあ、お金がある所には、あるって事なんじゃない？」

七海はやれやれ、といった表情で答えた。

ともあれ、毎日の生活費も馬鹿にならない僕らとしては、こんなにありがたい事はない。

親がいない僕や七海にとっては、少しでも節約しながら過ごせれば、それに越した事はなかった。

大学の費用も、一生懸命勉強した甲斐もあって、奨学生として入学させてもらえたし、後は社会人になってから、いくらでも返す事は

出来るだろう。

「唯、何食べるの？」

七海が聞いてくる。

「そうだな…。この『味噌煮込みうどん』にしようかな。」

「僕は、『和風御膳セット』にするよ。」

レイも、僕に合わせて答える。

「あなた達、渋いの選ぶわね。じゃあ、私は…。」

七海は食券販売機とにらめっこをしている。

「この『みそ！煮込みうどん』にするわ。」

「同じじゃんっ!？」

「違うわよ。この『みそ！煮込みうどん』にするんだもの。」

「言い方じゃんっ!？イントネーション変えただけじゃん!？」

「だって唯が、私が食べたかったものを先に言うからいけないのよ。」

「

「認めた!？なら、『私も同じものにする♪』とか、可愛く言えばいいじゃん!？」

「『私も同じものにする♪』」

「レイ！お前にいったんじゃねえ！お前は『和風御膳セット』だろ

！」

「唯の馬鹿。」

「誰が馬鹿!？」

「『唯の馬鹿?』」

「だから、真似するなレイ！しかも『?』は付いていなかったぞ!？」

僕は大きく喚き散らしながら、七海と二人分の『味噌煮込みうどん』のボタンを押した…。



お昼時にもなると、この食堂もほとんどの席が埋まる。僕らは、ようやく三つ開いている席を見つけ、お盆を置いた。

「やっぱ、みんな食べにくるよな。」

僕は言った。

これだけ安くて美味ければ、みんなここで食べるだろう。

「こんなに広い食堂でも、ほぼ全員、昼食を食べにくるんだから、混雑して当然だろうね。」

レイは言う。たしかに、そうだ。

「みんな、お弁当くらい作れば良いのに。大学生にもなって…。」
料理の一つも出来ない七海さんが、よくおっしゃる、なんて口が裂けても言えない…。

「そう言えば、君達って同じ『阿傘』って名字だよな？」
急にレイは話題を変えた。

「もしかして『学生結婚』とか？」

やっぱ、そう思われても仕方ないよな…。

「そうよ。」

「違います。」

七海の答えに、僕は即答した。

「何よ、似たようなもんじゃないの。」

不機嫌そうな七海。

そう。僕らは同じ『阿傘』という名字を持っている。

僕らだけではない。美樹や真夜も同じ名字だ。

『ある理由』から、僕と美樹、真夜の三人は『名字が無い』のだ。
いや、名字が無い以前に『名前すらなかった』のだ。

僕に『唯』という名をくれたのは七海で、妹二人に『美樹』と『真夜』という名前をつけたのは、僕だ。

これは、僕が高校時代の頃に遡る出来事。
話せば長くなるから、今は省くけど。

ともかく、そういった理由で僕ら3人には『名字』がまだ無かった。2年前の事件の後、七海が自分の籍に僕らを迎えてくれて、市役所で手続きを踏んで、僕らは正式に『阿傘』の一員となったわけだ。

「まあでも、『家族』には違いがないかな？」

僕は恥ずかしげもせずと言った。

「ヒュウ♪」

レイは口笛を吹く。…なぜ？

「これでわかった？クマくんの入り込むスキなんて、これっぽっちもないって事。」

入り込むって…。僕は、そっち系ではないんですが…。

「わからないよ？愛には国境も、世界をも超える力があるのだからね。」

レイ…。お前の言っている事は、さっぱり意味が解らん…。

二人の目が火花を散らせている…。なんの戦いなんだ、これは…？

「ま、今は一時休戦と行こう。食事が冷めてしまうし。」

「そうね。冷めた煮込みうどんなんて、煮込んだ意味、無いものね。」

二人は、お互い納得した様子で、食事を始めた。

「はあ…。」

僕は、この先、いったいどんな大学生活を送るのか、不安いっぱいに溜息をついた…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4881ba/>

『dejavu』

2012年1月13日14時49分発行